

エントレインメント

七木田 方 美

生後間もなくの乳児が、大人の表情や口の動きを模倣したり、2か月を過ぎるころには音声まねることをご存知でしょう。これらは、意図した「模倣」ではなく「共鳴動作」であり、意図の介入のないまま、反射的に自動的に生じてしまうものです。これをエントレインメント（引き込み現象）といいます。

エントレインメントは、親しい間柄の人が共にいることで生じるものであり、名づけたのはCordonです。彼は家族団らんの場において、コミュニケーションが円滑に行われている時には、家族が発話に同期し、身体の動きをお互いに同調させる、自己組織的現象が見られることを確認し、これを「エントレインメント」と名づけました。そして、コミュニケーション時におけるエントレインメントの重要性を示しました（Condon, W. S. 1986）。

Hallは、小学校の校庭で遊んでいる児童を観察し、一人の女の子がまるでダンスをするように校庭を移動すると、最初ばらばらであった子どもたちの遊びに共通のリズムが出現し、それが同調しながら広がっていくことを報告しています。これもエントレインメント現象です（Hall, E. T. (岩田訳) 1979）。

Trevarthenらは、未熟児と、その父親とのやりとりにおいて、その子どもの表情や手の動きは、その子に触れる父親の手の動きや、その子に話しかける父親の声の調子と、アダージェットのようなテンポで同期すると報告しています（Trevarthen, C. 1974, 1977, 1988, 1999）。これらの結果は、言語的な理解ができない赤ちゃんであっても、身体には、リズムカルな外部刺激に対して引き込み、引き込まれるという機能が

備わっていることを意味しています。下の写真は、食事場面における親子のエントレインメントです。



「味わっているのは、どっち？」

日本におけるエントレインメント研究は、小林登、石井らのグループにより紹介されています。特に母親と乳幼児のコミュニケーションに着目し、子どもと養育者の身体の動きや声同期することを報告しています（Kobayashi, N. 1992）（渡辺、石井、小林. 1984）（小林. 1988）。また、赤ちゃんを寝かしつけるとき、赤ちゃんとも母親の心拍や呼吸が同期し、共にゆっくりに

なっていくことで眠りにつくことも明らかにされています（渡辺. 1998）。

エンタテインメントは、他者や周囲の環境を感じ取り、それに合わせて自己調整するというコミュニケーションの原型なる機能であるといえるでしょう。

また、遠隔よりも対面コミュニケーションにおいて生成されやすい傾向があることや（渡辺、

大久保. 1998）、陽性感情において生じやすいことも言われています。

筆者は、0歳児の親子のクラスで、親子のエンタテインメント現象が生じる場面を見つけ、それをもとに意図的に親子の情動交流場面を創造しています。写真から、赤ちゃんと大人の表情が同じだということが分かります。気持ちも同じということも、想像できます。

